「そのぶっ太いチ〇ポでもっとオ〇ンコ激しくズポズポしてぇッ♥♥」
「大好きィ♥♥このキツイ臭いも味も♥長いのも太いのも♥チ〇ポならなんだって大好き♥」
「順番にしてあげるから♥ああん♥チ〇ポすごい♥」
ドスケベボディを持て余した女たちがチ〇ポを貪る！
基本枚数３４枚
差分込合計３００枚
淫乱女の乱交物語♥
ド乱交♡クエスト
XI

「どうだいボクちんのチンポ♥
とってもビックでいいだろう！」
「ああん凄く好きィ♥堪んないわァ♥
このデカさ！人間のチンポじゃ絶対
ムリだもの♥♥」

「ねぇブギー様あ♥マルティナは
もっと激しいのが好みなの♥♥
だからそのぶっ太いチンポでもっと
オマンコ激しくズポズポしてぇッ♥♥♥」
「勿論だよ♥ボクちんの可愛い可愛い
子猫ちゃん♥♥♥」

「そろそろ頃合かな！今からボクちんの魔力が宿った特別なザーメンを子宮いっぱいに注ぎ込んで子猫ちゃんをボクちんに従順な魔族にしてあげるよ♥」

「ブギー様♥ああ何これ？体中が熱いィ！どうにかなっちゃう♥♥凄いィ私♥♥ま・・魔族になっちゃった♥♥」

「子猫ちゃん♥このビップルームにいるお客様たちはボクちんのカジノの大事なお得意様だから頼んだよ♥♥」
「ハイ♥ブギー様お任せ下さい♥♥」

「うふふ♥お客様いつも当カジノ店を御利用頂きまして誠に有難う御座います♥♥♥お聞きの通り本日皆様を接待することになりましたマルティナです♥」
「おお君みたいなカワイ子ちゃんが接待してくれるのかい？楽しみだねぇ♥」
「お客様がお望みのものでしたら何でも致して差し上げましてよ♥♥」

「お客様如何ですかな？その子猫ちゃん中々のものでしょう♥♥」
「ええ！うちの女房とは月とスッポンですよ♥♥」
「このムッチリとした太腿♥芳醇な香り高い汗♥そして味わう程に私好みの味に変化する濃密な蜜液♥実に堪りませんな♥♥」
「そうでしょう！ボクちんの一番のお気に入りですからね♥当然ですよ♥♥」

「君の濃密な蜜液を息子にも
タップリと堪能させて
やりたいんだがいかな？」
「勿論です♥そのご立派な息子様を
蜜液のタップリ詰った私の肉壺へ
突っ込んで心行くまで堪能させて
あげて下さい♥」

「如何ですかお客様♥息子様も
私の蜜液にお喜びですか？」
「ああ！ものすごく悦んでいるよ
君の蜜液をいっぱい呷って
益々こんなに立派に育って
しまったよ！ハハ♥♥」

「息子もタップリと君の蜜液を堪能させてもらったよ♥♥」
「礼と言っては何だが息子がお返しがしたいと言ってね！」
「まぁ！嬉しいですわ♥喜んで頂きます♥♥」

「こんなに沢山♥少し肉壺に入り切らずに溢れちゃった♥♥」
「ねえ今度は僕達の息子を接待してよ♥♥」
「うふふ♥畏まりましたわ♥♥皆様ご一緒ですね！では輪姦プレイなんて如何です？とっても興奮して楽しいですわよ♥♥」

「ビッップルームでの評判凄く良かったよ♥
そんな訳で今日から魅惑の踊り子として
デビューだよん♥そのムッチムチのHな
体で遊びに来た人間のオスどもをボイン
ボインのプルンプルンしてとことん
骨抜きにしちゃうんだ！」

「ハイ♥畏まりましたブギー様ぁ♥
ここに居る人間のオス達を一人残らず
ボインボインのプルンプルンして私の
この体の虜にして見せます♥♥
ブギー様に頂いた魔力があれば
造作もないことですわ♥♥」

「あーあ！今日は有り金全部
擦っちまって散々だったけど
いまマルティナちゃんに
おしゃぶりしてもらえてっから
まあいいっか！」
「今日はホント残念だったね
でもそんなにガッカリしないで♥
損した分私が満足させてあげる♥
ほら凄く気持ちいいでしょ♥♥」

「ああん♥皆順番守らないとダメよ♥皆のもちゃんとしてあげるから♥順番よ♥順番にね♥♥」
「おおっ！堪んねえぜ♥♥」
「マルティナちゃん俺のチンポもおしゃぶりしてよ♥♥」
「あっ！ボクのもお願いィ♥♥」

「マルティナちゃんってホントヤラシー肉体してるよな♥♥」
「ホントだぜ！へっ♥♥」
「あのデカ尻見てるだけでヨダレもんだよ♥マジあの尻でヒップアタックされて昇天してみたいぜ♥♥」

「ほーらどこが感じるんだい？
ココかな♥それともこの辺かな♥
やっぱこの突起物をペロペロ
されるのが一番いいのかい♥♥」
「へへっ！あんなに腰クネらせ
ちゃって♥♥丸分かりだな♥♥
マルティナちゃんはやっぱ
そこが一番感じるってさ♥♥」

「マルティナさん！ボクのチンコが入ってるとこ大勢の人達にハッキリ見られちゃってますよ♥♥」
「ああんホント♥こんな大勢の人達にオマンコしてるとこ見られてる♥♥」
「こんもり盛り上がった恥丘もチンポが出たり入ったりしてる恥しい様子も全部見てるぜ♥♥」

「おおっ！急にオマンコの締まりが良くなってきた♥」
「あっあぁん♥それは・・・」
「もしかしてマルティナさんってしてるとこ他人に見られるの好きなんですか？」

「好きじゃ無きゃそもそもこんな事しねー」
「確かに相当好きって♥♥」
だよねマルティナちゃん！」
「ああん好きですう！見られるのも見せるのも両方大好きよ♥♥でも一番大好きなのはこの黒光りした逞しいチンポ♥♥」

「へへっ、嬉しそうにチンポ舐めやがって！そんなに好きかチンポ♥♥」
「大好きィ♥♥このキッイ臭いも味も♥長いのや太いの♥チンポならなんだって大好きよ♥♥」

「おい！見ろよこのマンコ♥
肉ヒダがこんなにハミ出して
メチャびらってるぜ♥♥」
『ああスゲーなこりゃ！
チンポ突っ込んだらこれが
絡み付いて来てチョー
気持ち良さげじゃね♥♥」

「ほーら！コレいいだろう♥どんどん激しくしていくぜ！」
「んんーッ♥ああっそこダメぇ♥」
「ココいいんだ！Gスポかな？」
「あっ違っ・・・そんなに押したら出ちゃ・・・・う
オシッコ出ちゃうッ♥♥」
「オシッコ？まあいいや出しちゃえ出しちゃえ♥♥」

「あはっ♥オシッコしながら
一緒にイッちゃった♥♥
「えっ！何々どうしちゃったの
その姿？」

「あん♥変身しちゃった♥
これデビルモードって
言うの♥ブギー様に頂いた
魔力の効果で魔族に変身
出来ちゃうの私♥♥」

「このモードになると凄く
身体能力が上昇するの♥
更に魔力も使える様に
なってるから！見ててて♥」

「こんな事だって簡単に
出来ちゃうの♥♥強制
射精よ♥♥全身鳥肌ものの
例えようも無い絶頂気分
でしょ♥♥」

『うおおっスゲーぜ！こんな
射精時の絶頂今までに味わった
ことなんか一度もねーぜ♥♥』
『ねぇ♥もっと味わいたい？
あっちの機能も凄く高まって
いるの♥試したいでしょ♥
ウフフ♥魔族の肉体の素晴ら
しさ皆にとことん教えて
あげるわ♥♥』

『まさかこんなカワイ子ちゃんが
逆ナンしてくるなんてな♥♥』
『君この辺じゃ見ない子だな♥』
『あっ！俺見たことあるぜ♥確か
魔物がやってるカジノにいる
よね君！』

「あーその力ジノ俺も知ってる
何かチョービッチなバニー
ちゃんがいるって話だぜ♥
確かお姉さんみたいなポニー
テールの髪型をしてって
あれ？それってもしかして
お姉さん！」

『うふふ♥正解♥♥』
『そうだったんっスか！』
『そう言えば逆ナンしといて
まだ名前も教えてなかったわ
私マルティナよ♥魔物の
カジノでバニーちゃんを
してまーす♥♥』

「ああ！まさかあの有名なバニーちゃんと俺いまオマンコしちゃってんの♥」
「マジだぜ！俺達チョーラッキーなんじゃねぇ♥♥」

「ねぇ男好きする私のHなカ・ラ・ダ♥どうかしら？」
「マジ堪んないっス♥♥」
「ホントすげぇヤバいっス！」
「チンポの先から脳天までゾクゾクしっぱなしっス！」

「そんなに気に入ったの♥
じゃあ今度カジノに遊びに
来たらここでは出来ない様な
凄い事いっぱいしして
あげちゃう♥♥」
『絶対遊びに行くっス！』
『うふふ♥約束よぉ♥♥』

『ねえそこのお兄さん達♡お暇でしたらこの私とととっても気持ちいい事して遊びましょ♡♡』
『ほらお兄さん見てェ♡♡うふふ♡凄いでしょ♡♡』

『わぁお！お姉さん何この水着♥
ほとんどヒモじゃんヤラシーなぁ♥
オッパイもデカくてエロエロ♥♥』
『ちょっと揉ませてよ♥♥』
『ええ♥いいわよ揉んでも♥♥』

『へへっチョーー柔らけー♡掴んだ手をゆっくりと押し返してくる弾力と手に吸い付いてくるこの感触ホント堪んねぇ♡♡』
『それにしてもお姉さんの乳首相当デカいね♡目が釘付けになっちゃうよ♡♡』

『すげぇコリコリのビンビンだね♥
どんな事したらこんなエロエロな
乳首になっちゃうんだい？』
『俺達みたいに逆ナンした
奴らにいっぱいイタズラ
されちゃったんでしょ！
ねっ♥お姉さん♥♥』

『お姉ーさん♥俺達にもその
エロ乳首弄らせてくれよ♥♥』
『スゴッ！メチャ勃起してた
乳首どんどん乳輪にめり
込んでいくよ♥ホラもう
少しで全部入っちゃうよ！』

「ああん♥二人とも弄り方が何だかオジさん臭いわよ♥♥」
「それと硬く勃起した乳首いきなり乳輪にそんなに強く押し込んだらダメよ♥凄く敏感なんだから初めは優しくしてあげて♥♥」

『うふふ♥皆おチンポ凄い勃起しちゃってるじゃない♥♥』
『こいつも早くお姉さんと気持ちいい遊びしたくてウズウズしてるよ♥♥』
『じゃあそこの建物の裏手で皆で気持ちいい事いっぱいしましょう♥♥』

「ここなら人目を気にせず
好きな事できるわ♥
ほら私のオマンコも準備
OKよ♥♥」
「うふふ♥誰のおチンポ
一番に頂こうかしら♥♥」

『お姉さん！オレオレ♥』
『一番はボクとしよう♥』
『俺のチンポ凄くいいぜ！』
『俺のはメチャデカいぞ♥』
『そうね・・・・うふふ決めた
そこのバンダナのお兄さん
最初にしましょう♥♥』

「それにしてもお姉さん
大きくてエロい尻
してるな♥へっそんじゃ
一番マンコ頂くぜ♥♥」
「ああん♥早くきてエ♥♥
そのぶっ太いおチンポ
入れて♥入れてえ♥♥」

「あっあん♥いい♥いいイ♥
貴方のチンポ凄くいいイ♥
先っぽから根元までコの中
ぶっ太くてオマンコの中
チンポでいっぱいよ♥♥♥」
「ああん♥堪んないイ♥
もっとズポズポしてエッ♥
いっぱい穿ってェッ♥♥」

「ああ〜ッ♥そ・そこお
気持ちいいィ♥♥あはっ♥
オマンコおイッちゃう♥
イッちゃうッッ♥♥」
「おおっ！お姉さんそんなに
ケツ振ったらチンポ抜け
ちまうぜ♥イキたいなら
こっちにケツ向けてしっかり
踏ん張りな！」

『あ～あ！お姉さんちゃんと
踏ん張らないからイク時
チンポ抜けてそこら中に
ザーメン撒き散らしちゃ
ったじゃん！』
『だって♥そんなので
思いっ切りされたらムリよ
踏ん張れないわ♥♥』

「じゃあ次はそのお兄さんのチンポ♥
ハメてェ♥♥今度はこうして
四つん這いになるから大丈夫よ
ちゃんと射精受け止めるわ♥♥」

『おおっ！これがお姉さんのどスケベ
マンコ♥中すげぇウニョってて
チンポに良く絡み付いてくるぜ♥♥
それにさっきイッったばかりなのに
良く締まるな♥このマンコ♥♥』

「ほらお姉さん聞こえるかい？
お姉さんのマンコすげぇヤラシー
音立てて俺のチンポくわえ込んで
るぜ♥こんなにビチョビチョにして
誰のチンポでも突っ込まれりゃ
嬉しいんだな！」

「ああん♥そうなの！チンポなら
誰のでもいいのよ♥♥私とオマンコ
したいって人がいたら直ぐに
ヤらせてあげちゃうわ♥♥」
「お姉さん♥とんだやりマンだな！」
「うふ♥だって好きなんだもん♥♥
チンポもザーメンもね♥♥」

『ふう～ッ♥出した・・出した♥
中に外にありったけ射精したぜ！』
「俺も出したぜ！でも何だ？全然
チンポ萎えねーなあ！」
『あっオレもだよ！まだギンギン
してるぜ！ほら♥♥』

『うふ皆♥こんなに出したのに何でまだ元気なままなんだろうって不思議に思ってるでしょ！実はそれ私の力のお陰よ♥♥』
『お姉さんの・・・・？』
『そう私の淫魔の力がそうさせてるの♥口で言っても分からないでしょ！待っててて♥今見せてあげるから♥♥』

『うふふ♥どう驚いた？これが私の
もう一つの姿淫魔のマルティナよ♥
私のご主人様の魔物ブギー様に
犯されまくって魔族に目覚め
ちゃったの♥♥』
『このカを使えばチンポをずっと
勃起させたままにだって出来
ちゃうんだから♥それに淫魔
とのセックスはいいわよ♥何度
イッても萎え知らずよ♥♥』

『ああ何か淫魔になったお姉さんも
凄くいい♥とっても可愛いね♥』
『おっ俺のチンポ力がどんどん
漲って来て初めよか硬いぜ♥♥』
『ねぇ♥淫魔の私とヤりたい？
人間のままじゃ味わえない淫楽を
このカラダで体験させてあげる♥♥』

「さぁ皆♥私の体に思う存分ザーメンを吐き出すのよ♥♥」
「おおっ！チンポが急に熱くなって勝手に・・・ううッ出るッ！」
「ああ♥この鼻を突く臭いィ♥ネットリと肌に纏わり付く大量のザーメン・・・何度浴びても堪んないわ♥まだまだタップリ搾り取ってあげるから頑張るのよ♥♥」

『ああマルティナさん！ちょっと見ない内に何でこんなHな体になっちゃったの？』
『そう言えば！あのブギーって魔物のことご主人様って言ってたよね！もしかしてアイツに何かイヤラシイ事されちゃったの？』

『勇者くん中々助けに来てくれないから
その間に私ブギー様にいっぱいHな事
されちゃったわ♥♥」
『毎日パイズリにフェラチオ♥
ギンギンになったチンポでオマンコ
ズポズポ犯されてその度に大量の
ザーメンを中出し♥他にも恥しくて
教えられない様なHな事いっぱい
されたの私♥♥」

『ああゴメンなさいマルティナさん！
でもボクが来たからにはあんな奴に！
好き勝手ヤらせません！』
『有難う勇者くん♥嬉しいわ♥
ただもう手遅れなの！既に
私の身も心もブギー様に
墜されたわ♥今じゃこんな
姿になって人間の男達を
色仕掛けで誑し込む淫魔に
なっちゃったわ♥♥』

『もう丸っきり勇者くんが知ってる私じゃないの！』
『身体つきだってこんなにオッパイやお尻が大きくなって男が悦ぶ凄くヤラシイ肉付きしちゃってるでしょ♥♥』
『確かに以前のマルティナさんとは雰囲気も身体つきも全然違うけどボクも今のマルティナさん凄く好きだよ♥♥』

『うふふ♥勇者くんも本当は
こんな身体つきがタイプなのね♥
良かった・・・・♥』
『じゃあこんなになった私でも
嫌いにならないでいてくれるのね？』
『勿論だよ！全然嫌いじゃないよ♥
好き！好き！大好きだよ♥♥』
『ああん もっと言ってぇッ♥♥』
『大好きだよ マルティナはボクの
ものだぁ――ッ！』

『マルティナ！ボクの想いが詰ったザーメン送り込むから受け取ってイクよっ！』
『あああっ凄いィ♥子宮に流れ込んだザーメンとっても温かくて身体全体が勇者くんに優しく包まれている感じ♥ああ体が元に戻ってくわ♥これが君の力勇者の力なの！』
『違うよ！愛の力だよ♥♥』

「うふふ♥シャール様とっても良くお似合いですよ！その仮面姿♥」
『あら本当♥嬉しいィ♥♥マルティナさんも着け慣れてるだけあって凄く馴染んでて素敵ですわ♥♥」
「お褒めに預かり光栄です♥でもまさかシャール様が私と同じ様な趣味の持ち主でしたなんてね！あの街で出会わなければこんな風に趣味を共有する事もなかったでしょうしあの時会えて本当に良かったですわ♥♥」

「わたくしもあの時マルティナさんが同じ様な性癖をご趣味になさってると知ってすわ♥凄く嬉しかったですわ♥それがきっかけで今私達こうして趣味を共有出来てるんですものね♥♥」

「うふふ♥本当ですね♥さぁシャール様！今日はとことん愉しみましょう♥じゃあ皆その逞しいチンポで私達のオマンコいっぱいファックしてえ♥♥」

「ああん♥太いわ♥
ねぇ♥もっと奥までポン
挿入して貴方のチンポ
じっくり堪能させて
頂けないかしら♥♥」

「うふ♥私もお願いィ♥
抉る様に膣壁にチンポ
擦り付ける感じで激しく
オマンコずぽずぽはしてぇ♥
あっあん♥そう！凄く
いいッ♥オマンコ
気持ちいいィ♥」

「ああん♥気持ちいイ♥
アッアッのザーメン
いきなりこんなに沢山
膣内に射精されちゃい
ましたぁ♥まだ一人目
なのに凄い量です♥♥」
「あはっ♥私もよ♥♥
膣道から子宮の中まで
熱い精液でいっぱいよ♥
気持ち良くてオマンコ
ジンジンしちゃってる♥
ねぇ次は誰♥早くきてぇ♥
熱いの頂戴♥♥」

「へへっ♥いいぜ！一晩中かけてタップリと俺のザーメン御馳走してやるよ♥ほらケツこっち向けてもっとマンコ開きな！」
「僕のチンポもヤる気満々だよ♥二人ともとことん愉しませてあげるね♥」
『おいおい！次はオレだぜ！』
「いいや！俺がヤる！」
「ああん♥誰でもいいから早くう♥挿入してェッ♥♥」

「セーニャちゃん♥本当にいいのかい？俺達なんかのこんな我侭な願い聞いてくれて！」
「ハイ♥私で良ければ構いません♥」
「ホント♥やったぜ！まさか本当にOKしてくれるなんて！ダメもとでも一応言ってみるもんだぜ！」

「うふ♥そんなに喜んでくれるなんて
私も凄く嬉しいです♥♥」
「世界があんなことになって
心が正直折れそうになった時
皆さんにいっぱい元気をもらって
たから・・・少しでもいいから
そのお返しが出来たらいいなって
思ってたんです♥♥」

「それと・・・実は私も皆さんのそのムキムキな肉体を見ててたまにHな妄想とかちょっとしちゃってたりなんかしてたんです♥♥」
あは♥言っちゃったぁ♥ああん♥
恥しいィ・・・♥♥」

『おおっ今の照れたセーニャちゃん
メチャ可愛いイイ♥♥』
『まさかセーニャちゃんも俺達を
オカズにオナってたなんて♥』
『ああなんか俺セーニャちゃんが
Hな妄想してる姿を逆に妄想して
もうイッちゃいそうだよ♥♥』

『おおっセーニャちゃんのオッパイちょー気持ちいいィ♥スライムよりプニプニじゃん♥♥♥』
『へへっこっちの方はどうかな？わぉ！もうパックリ開いちゃってるね♥しかも既にヌルヌルだよ！』

「ねぇセーニャちゃんもっと足開いてヌルヌルオマンコ見せてよ♥」
「ああん恥しいィ・・・こ・こうですか♥」
「おお！オマンコ♥堪んねぇ！」
「ああダメだ！一回抜かねーとチンポ爆発寸前だぜ！」

「取敢えずセーニャちゃんオカズに一回みんな抜いとくか！」
「へへっそうだな！俺なんかもう先走り汁ダラダラだしな♥」
「そんじゃあセーニャちゃんイクよ♥」
「ドピュピュッ♥ビュルン♥」

「あぁん凄いィ♥チンポ♥チンポ♥
チンポ♥こんなに沢山のチンポから
一斉に射精されると体中ザーメン
塗れでトロトロトロぉ♥♥それと鼻を突く
Hな臭いがプンプンして堪んない♥
でもこれ直ぐシャワー浴びないと
カピカピになっちゃう♥」

「遂に俺セーニャちゃんとセックスしちゃったよ！おおっ入ってる♥」
「私もとうとう妄想じゃなくて本当にセックスしちゃってる♥オマンコにおチンポ入ってる♥」

「夢じゃなくて本当にセーニャちゃんのオマンコに俺チンポ突っ込んでるよ！メチャ気持ちいいィ♥♥」

「ああん私もよ♥今まで何度も皆にこんな事されちゃう場面を妄想してたの♥」

「あっあん♥凄く気持ちいいィ♥
本物のおチンポはとっても
熱くて硬くてオマンコの中が
いっぱいになる位大きいィ♥」
「セーニャちゃん俺のチンポで
そんなに悦んでくれるなんて
気に入ってくれたんだね♥」

「なぁ！後が支えてんだから早く代わってくれよ！お前時間オーバーだぞ！」
「そうだよ！俺達にも早くセーニャちゃんとオマンコさせろよ！」
「いまイクからもうちょっとな！」

「ああん皆そんなに怒らないの♥
もう少し待ってあげて♥彼
そろそろイキそうだから♥」

「ちゃんと順番に皆とオマンコ
してあげるから♥それまで
焦らずいい子にしててね♥♥」

『セーニャちゃん♥今日もお願い出来るかな？』
『うふふ♥勿論いいですよ♥セーニャはもう皆のオマンコ妻みたいなもの♥ですから何時でも何処でも好きな時に私のオマンコお使いになって下さい♥♥』

「へへっセーニャちゃん自分で自分の事オマンコ妻だなんて言っちゃって！「このスケベ♥」
「ハイ♥セーニャはとーってもHな女の子です♥♥」

「セーニャは白馬の王子様を夢見る女の子じゃ全然ないんですよ♥」
「本当の私は白濁したザーメンがとっても大好きで毎日チンポの事ばかり妄想してるスケベさんなの♥」

「だ・か・ら♥もっとかけてェ♥
セーニャの大好きな皆の
ザーメン♥セーニャにいっぱい
ちょーだい♥♥」
「おおっ！任せてセーニャちゃん♥♥」
「好きなだけ御馳走するよ♥♥」
「俺だって！ほら出すよ出すよ♥♥」

『あはっ♥いい♥これ最高♥
もっと出る？飲ませてェ♥
んはぁ美味しいィ　皆のが
混ざり合って堪んない♥♥』
『こんなの味わっちゃったら
もう私皆のチンポ無しじゃ
生きていけない♥♥』
『大丈夫俺達が飼ってやるよ♥』

「セ・セーニャちゃん！その格好どうしたの？」
「これ？街の衣装屋さんに売ってた踊り子の服を購入して少しアレンジしてみたの♥♥♥ねぇ似合うかな？」

「に・似合い過ぎですっ！メチャエロくて神懸ってますよ♥♥」
「マジ堪んないっスよそれ♥♥あああチンコ硬くなって来たぜ！」

「うふふ♥皆ったら何時もより
ギンギンに勃起させちゃって♥♥」
「こんな感じの衣装が好き
なんですか？」
「「ハイ♥大好きです♥♥」」

「じゃあこんなHな踊り子の
衣装を着たセーニャを皆は
これからどうしたいの？」

「そりゃあこいつがへタるまで
犯して犯して射精しまくります♥
「ああん素敵ィ♥♥」

「あっちゃん・まだなのっ！
あいつら大師であるこの
アタイをどんだけ待たせて
焦らす気なのかしら・・・
んんっ早くチンポ欲しい
チンポ・チンポぉ♥」
「大師様っ遅れて大変
申し訳ありません！」
「もうっお前達っ！
遅すぎィ！」
「いやぁ～勇者様が中々
稽古の相手から解放して
くれなくてですね～」
「そんな事はいいから
さっさとアタイの相手
して頂戴ッ！もう我慢の
限界なんだから！お願い
チンポ欲しいのぉ♥」

「ああん早くそのチンポ♥
オマンコに突っ込んでェ♥
前座なんていいから
直ぐ突っ込んで激しく
ズポズポしてェッ♥」
「大師様今夜はまた見事な
発情っぷりですね！」
「へへっ昼間の稽古で
俺達の汗の臭いと体臭を
嗅ぎ過ぎてメス豚の
スイッチが入っちまった
んだろ！」
「そうよ♥だから早く発情
したメス豚のアタイと
交尾して頂戴！」

「ご希望通りタップリ
今からチンポ突っ込んで
あげますよ！ほ～ら
大師様の大好きなチンポ
全部オマンコに入り
ましたよ！」
「ああ・・・待ちわびた
チンポやっとキタァ♥♥」
「そんじゃあ一丁激しく
いきますよ大師様！」
「んあっ・・・スゴッ
チンポめり込んでるう♥
子宮にまでズポズポ
入って来てるのぉ♥
ああっダメッこんなの
直ぐイッちゃうオマンコ
もうアクメっちゃう♥
ああああイクイクッ♥♥」

「こりゃあホント見事に
オマンコ発情してますね
大師様！」
「ああんそうよ見ただけで
分かるでしょ♥
自分でも抑え切れないの♥
チンポで無茶苦茶に犯して
もらわないともう収まりが
つかないわ♥」
「分かってますって大師様
子宮がザーメン欲しがって
たまんないんでしょ？」
「ええそうよ♥分かってる
なら早く頂戴ッ！子宮に
濃厚な精液飲ませてェ♥」

「本当にいいんですか
中出ししちゃって？
俺命中させちゃうかも
しれないっスよ！」
「あぁん♥だって子宮が
発情しちゃってるのよ♥
お腹の中でキュンキュン
って収縮して精液を
欲しがられたらもう牝
なら拒めないのぉ♥」
「そんじゃあ遠慮なく
種付け交尾といきますよ
大師様！」
「いいわキテぇ♥大口開けて
待ってるアタイの子宮に
思いっきり精子流し込ん
で頂戴ッ♥♥」

『おお大師様っ俺そろそろ
イキそうっス！本当に
子宮に出しますよ！』
『ああん出してエエッ♥♥』
『くうッおおお出るッ！』
『ああっ熱いのキタあ♥
ああんスゴイ量♥子宮の
中が一気に熱い精液で
満たされていくう♥♥』
『大師様これマジで受精
しちゃったんじゃ
ないですか？へへっ』
『た・確かに今子宮に
卵子がいたらお前の
精子に犯されて妊娠
ものよきっと♥♥』

「大師様がお弟子の方とまさかあんな事してたなんて・・・・正直凄くビックリしました！」
「まさか勇者殿にあんな所を見られていたなんて・・・・」
「・・・・すみません」
「いいさ謝らなくても！どうせあいつ等に面白いものでも見せてやるってそのかされて覗いていたんだろ？」
「ハイ！部始終見てました！」

「年甲斐も無くあんな破廉恥な行為に悦び狂うアタイを見て卑しい女だと思ったでしょ？」
「あっいえ・・・そんな事ないです」
「いいのよメス豚のアタイにそんな気を使わなくても」
「本当です！それにボクも大師様のあのお姿を覗き見しながら何度もオナって射精してたから一緒です！」

「うふふ本当に？このアタイで勇者殿抜いてくれたの？」
「ハイ何度も抜きました！」
「じ・じゃあ勇者殿もあんな事してみたい？」
「えっ！いいんですか？勿論したいです大師様っ！」
「あんっ♥急にガッついちゃってうふふ勇者殿ったら顔に似合わず結構おサルさんなのね♥」

「じゅる・・じゅぽっ・・んぐぅ
んぼぉ・・れろんれろん」
「あぁ大師様っ！それ・・・・
スゴ過ぎィ！チンコが
溶けちゃいそ・・・・ううッ！」
「じゅぽんっ・・ずずっんんっ
あは♥勇者殿のおチンポ
とってもアタイ好みの味♥
凄く美味しいわ♥♥」
「うわぁぁぁっ舌が・・・・」

『んふふ勇者殿アタイの尿道ファックとっても気持ちいいでしょ♥♥』
『あううタマタマの方までゾクゾクき・きますう』
『んぐっ美味しいイ♥だいぶガマン汁の味が濃くなってきたわ♥量も増えて来たしそろそろ射精したいのね！』

「ああ大師様っ！し・・舌抜いて
下さいっ・・・・もう出ますっ！」
「うふっイクのね♥いいわ出して♥
勇者殿のお精子でアタイのお口
思いっきり犯してェッ♥♥」
「ううっ出るッ！あっ・・・」
「おおおんっ♥んはあスゴイ量
トロトロのネバネバの上に
頭がクラクラしちゃいそうな
強烈なザーメン臭・・・♥♥」

「だ・・大師様のフェラ気持ち良すぎて
いっぱい射精しちゃいました♥
済みません顔中ザーメン塗れに
しちゃって・・・・こんなに出る
とは思わなかったです」
「うふふ全然いいのよ♥それより
ホント堪んないわ勇者殿の
ザーメン♥♥こんな精気溢れる
お精子今まで味わった事ないわ♥
即堕ちしちゃいそうよ♥♥」

「あっあん♥勇者殿ったら
さっきあんなに出したのに
凄くおチンポ元気♥」
「大師様のココも凄いですよ♥
ヌルヌルのまん汁いっぱい
溢れさせながらボクの指に
嬉しそうにしゃぶり付いてきて
オマンコからヒダがいっぱい
ハミ出しちゃってますよ♥」

「やん♥そんなにハミ出ちゃってるのオマンコの肉ヒダ？
「ハイ凄いです！ボクの指にしゃぶり付いてる肉ヒダが指の動きに合わせて割れ目からムニュウって飛び出すんです♥そのヒダが凄くビラビラしてとってもヤラシイです♥」

『ふふっ勇者殿♥
そのとってもヤラシイ
びらびらオマンコ♥
早く味わいたい？』
『勿論です！
早く大師様の愛液で
グチョグチョになった
オマンコにしゃぶり
付いて肉ヒダを舐め
回したいです！』

「さあ勇者殿思う存分味わって♥」
「ハイ♥あはっ大師様オマンコ下から見上げると一層肉ヒダがハミ出して見えてヤラシイですよ！」
「ああん恥しいわ♥♥」
「じゃあ大師様頂きます♥」
「はぁん召し上がってェ♥」
「あはっスゴイや！匂いも味も頭にガツンときて理性が一気に吹っ飛びそうです！」
「うふふ♥それがオスをねだる発情したメス豚のヤラシイ性器よ♥」

「ああ大師様！愛液が
どんどん溢れてきて
止まらないですよ♥」
「勇者殿のおチンポが
欲しいって駄々をこね
出したみたい♥もう
そうなったらダメよ♥
早くこれでオマンコ
塞がないと大洪水に
なっちゃうわ♥♥」
「うわぁ！さっきより
もっとビチョビチョ
になってきた直ぐに
塞き止めないと！」

「ああっ！もう中は
愛液で奥の方まで
ジュプジュプしてて
オチンチン突っ込んだら
余計溢れてきちゃい
ました大師様！」
「ああん勇者殿
こうなったら
おチンポを激しく
ズポズポさせて
中に溜まった愛液
全部掻き出すの！
そして仕上げに
オマンコの中に
粘り気のある
勇者殿の精液を
いっぱい流し
込めばアタイの
子宮も満足して
収まるはずよ！」

「ああん勇者殿！その調子よ♥
中に溜まっている愛液が
どんどん掻き出されて
おチンポの感触がハッキリ
分かる様になってきたわ♥
あん激しいイ♥勇者殿！
ああっ凄く感じちゃうううッ♥
はぁあん♥もっと激しく
アタイを犯してえ♥♥」
「大師様っ！ボクも
凄く気持ちいい
です♥さっきまで
愛液でズブズブ
だったオマンコも
だいぶ愛液の量が
落ち着いてきて
大師様の肉ヒダが
ボクのチンポに
絡み付く感触が
凄く良く分かり
ます♥ああっ
気持ち良過ぎです
大師様ぁ♥♥」

「ああっ勇者様あ♥好き・好きィ・大好きィッ♥♥お願い勇者様アタイを・・・どうか勇者様の女に・・・いえ性処理専用の豚でも構わないからメス豚家畜として飼ってエエッ♥♥」
「ほ・本当にいいんですか大師様？ボクの・・・その性処理・・・家畜になりたいって・・・ボク本気にしちゃいますよ♥大師様本当に本当にいいんですね！」

「ええ本気よ♥ニ・ニマは
勇者様の性処理専用メス
豚家畜です♥♥」
「分かったよ！本気なんだね
ところで大師様飼い主の
お仕事ってやっぱ一番は
家畜の数を増やす事だよね♥
生育したメス豚の数を増やす
のも重要だけど・・・・まずは
今ここに居るメス豚さんに
子豚を孕ませる事かな♥
ちょうど凄く発情もしてるし
ねっ大師様♥」

「ああ勇者様っ確かにそうですわ♥この卑しく発情したメス豚めに今ここで種付けして下されば間違いなく子豚を孕みますわ♥ねぇ勇者様♥さっそく種付けして下さいますか？」
『勿論だよ♥ボクのザーメンでタップリ種付けしてあげるよメス豚さん♥♥』
「ハイ♥お願いします♥♥」

『ああっ勇者様ぁ♥それ凄くいいイ
子宮にジンジンきちゃいます♥♥
『お願いです！もっと力強く下から
突き上げてわたくしの子宮を
激しくズポズポ穿ってェッ♥♥』

『お・王女様っ！先程から勇者様ばかりお相手なさって！我々も相手して下さい！』
『勇者様に跨って淫らにケツを振るシャーール王女の破廉恥なお姿にもうご覧の有様です！』

『もう・・・しょうがないわね♥
いいわアナタ達も交ぜてあげるわ
さぁこっちにいらっしゃい♥♥」
『うふふ♥血管が凄く浮き出て
今にも射精してしまいそうね♥
もう我慢出来ないんでしょ！
二人ともぶっかけていいわよ♥」

『うふふ凄い量ね♥それにとっても美味しいわアナタ達♥後で下のお口の方にもいっぱい頂こうかしら♥』
『ほ・本当で有りますか？シャール様！光栄で有ります♥腰が砕けようともシャール様に御満足頂ける様励みます♥』

『やっと来ましたか王女様！マントの下はちゃんと俺が言い付けた通りの格好で来たんでしょうね？』
『ハイ♥勿論です♥ほら見て下さい♥マントの下はご命令通り丸出しの破廉恥な格好でここまで来ました♥』

「王女様良く似合ってるぜ！城の奴らも
まさか王女様にこんなご趣味がお有り
だったとは絶対気付かねーよな！ハハ」
「で・どうよ！ここに来るまでに何人
の奴にマントの中見せてやったんだい？
「ふ・二人です・・・♥後は恥しくて
声すら掛けられませんでした」

『なんだたった二人か？まぁ初めての痴女プレイにしちゃ上出来か！』
『それで王女様は人に見られる事に興奮したのかい？それとも自分が見せる事に興奮を覚えたのかい？どっちかな正直に言ってみな！』

『み・見せている自分に凄く興奮していたと思います♥」
『人通りが少ない路地裏でしたが通り掛かった殿方にこんな破廉恥な姿を私自身の意思で見せた時明らかに恥しさとは違ったドキドキがありました♥」

『あ・あの・・・そろそろ
お約束していた物をわたくしに
下さいませんか？』
『ああ・そうだな！いいぜ♥』
『どこに欲しいんだい？』
『まずはオッパイにお願いします♥』
『そのだらしない乳にか？
へへっ♥じゃあイクぜ！
タップリ味わいな♥♥』

「おおっ今日はまた
随分とオマンコ
ヌルヌルじゃん♥
見ず知らずの男に
見せてこんなに
オマンコ濡らして
来たんだ♥」
「俺の方まで蒸れた
マンコの臭いが
プンプン漂って
来るぜ！シャール
王女様！」

「へへっシャール様
相変わらずクリを
コロコロと舌先で
転がされるのが
弱いんっスね♥
ケツの穴ヒクヒク
させながら大きな
お尻が小刻みに
震えてますよ♥♥」
「あっあぁん♥♥
そ・そんな所
激しく舐められて
弱くない女なんて
いないですわ♥♥」

「あっあん♥ああっ♥
気持ちいいィ♥♥
ああ♥それホント
わたくし弱いのぉ♥
ダメえイッちゃう
イッちゃうううッ♥♥
あはぁ♥イクうッ♥」
「おおっ！キタキタ♥
シャール様オマンコ
盛大に潮ふいちゃっ
てますよ！スゲー♥
イキまくりのびしょ
マンちょーウメえ♥」

「ド淫乱のシャール様
イキたてのびしょ
マンに大好物の肉棒
タップリおしゃぶり
させてあげますよ♥」
「あぁんっ♥早くッ♥
早くぅ♥お願いィ♥」
「ほーら入ったぞ！」
「あはっ来ましたぁ♥
大好きチンポで
前後から串刺しィ♥
あぁん♥太いィ♥♥」

「うおおっ締まる！
チンポ動かすのも
やっとだぜ！ヤバっ
メチャ気持ちいいな
このマンコは♥♥」
「こっちもかなり
吸い付きが良くなっ
てきたぜ！おおう！
こりゃあ強制的に
ザーメン吸い取られ
そうだぜ！ハハッ」
「うふ♥イク時は中に
わたくしの体の中へ
お二人共お願い
いたしますわ♥♥」

『シャール様温泉に来たらやっぱ混浴でしょう♡混浴！俺達と一緒に入りましょう♡♡」
『うふふ♡混浴いいわよ♡♡」
『あっ！温泉に入る時タオルは着けて入っちゃダメですよ♡」
『ええ分かってますわ♡♡」

『わぁお！シャール様♥その・・・何て言うか使い込まれた熟女の様な色・形の乳首なんですね！』
『うふ♥コレですか？子供も結婚もまだなのにこんなに伸びた乳首してとってもはしたないってお思ってるんでしょ？』
『いえッ！そんな事は思ってません！』

『ただ・・・どうしてそんな一言で言えばヤラシー乳首しているのかなぁって色々と妄想はしちゃいました♥♥』
『あのシャール様！俺以前街で王女様に良く似た痴女が出るって噂話をちょっと耳にした事があるんですけど・・・・・あれってもしかして・・・もしかしてですか？』

『うふふ♥その・・・もしかしてです♥』
『マジっスか？王女様なのに痴女っスか！
『じゃあこのヤラシー乳首は・・・・へへっ』
『そうよ♥わたくしが街で出会った
見ず知らずの男の人達にイタズラさせて
あげてたら・・・何時の間にかに
こんな風になってしまってたの♥』

『ねぇアナタ達も・・・イタズラしてみる♥♥
『マジで！勿論っスよ♥こんなスケベな乳首
した女なんて巷でもそうは居ませんからね！』
『うふふ・そう♥じゃあいっぱい遊ばせてあげる
結構痛いのも好きだから♥皆でイジメてね♥♥』
『乳首伸びた一番の理由はそれですか？』
『『まったく！このどスケベ王女様♥♥♥』』